

第 12 回 童話研究とワイルドの童話

児童文学の本質の究明による学問的な光が当て始められたのは戦後になってからのことである。昭和 22 年(1947)12 月に児童福祉法、昭和 26 年(1951) 5 月の児童憲章が制定され、子供の人格や権利が保障されるようになったことが大きな要因であろう。大正時代には早くも大正 13 年 (1924) 11 月の有富郁夫『児童文学十講』(東京出版社)、大正 14 年(1925)9 月の富山師範附属小学校編『児童文学の研究』(明治図書)のように「児童文学」という呼称も使用されているが、明治時代では「お伽噺」、大正時代からはほとんどが「童話」という表現であったようだ。童話・児童文学研究では、「童話」と「児童文学」とを区別して使用しているが、ここでは用語上、「童話」と「児童文学」を特に区別はせずに使用するものとする。

(1) 童話

ワイルドの童話、いや西洋の童話自体が日本に定着する前から、文学として童話や児童文学はすでに紹介されていたのは周知の通りだ。

日本における英米文学の初の紹介は、嘉永元年(1848年)の稿本『漂荒記事』であったという。これは、蘭学者黒田麴盧が蘭語本からデフォー(Daniel Defoe, 1660-1731)の『ロビンソン・クルーソー』(*Robinson Crusoe*, 1719)を抄訳したもの⁽¹⁾

であった。しかし、明治期を通じて最大の収穫は『女学雑誌』に連載された若松賤子訳『小公子』である。明治 23 年(1890)8 月から 10 月にまず連載され、その後中断されたものの、明治 25 年(1892)7 月には完成した。これはバーネット(Mrs. Frances Hodgson Burnett, 1849-1924)の *Little Lord Fauntleroy* (1886)の翻訳である。⁽²⁾

ワイルドはもちろん童話も創作し、日本では早くから紹介された。日本の童話に関する考え方は、明治 24 年(1891)1 月に「少年文学叢書」の第 1 巻として巖谷小波『こがね丸』が出版され、童話を含めた児童文学が定着したようだ。

明治時代において児童文学がどのように誕生したかといえば、その契機は、思想史的には、その時代に入ってようやく子どもが、条件つきではあるけれども人格を認められるようになったからであり、社会史的には、近代日本の国家が近代的な社会をつくるためのファクターのひとつとしてそれを必要としたからであった。⁽³⁾

昔物語、伝説噺、お伽噺などを文学的に取り扱う時にはお伽噺とし、教育的に描いた場合には童話というような傾向が明治時代にはあったが、大正 7 年(1918)7 月の鈴木三重吉によって『赤い鳥』が創刊されると、童話に対する見方は新たな局面を迎えるようになった。

大正七年七月、鈴木三重吉は雑誌『赤い鳥』を主宰発行した。創刊のプリントを見ると、「西洋人とちがって、われわれ日本人は哀れにも未だ嘗て、ただの一人も子供のための芸術家を持ったことがありません」とある。だからこそ、『赤い鳥』によって『芸術としての真価のある純麗な童話と童謡を創作する』最初の運動を、当今文壇一流の作家詩人の協力を得て推し進めたい、と三重吉は主張したのであった。鈴木三重吉は東京帝国大学英文科の出身で、在学中夏目漱石の知遇を得、明治三十九年に処女作「千鳥」を発表し、文壇に登竜した既成の作家であった。その三重吉が、子供の文学に献身することを宣言したのである。⁽⁴⁾

『赤い鳥』の登場により、童話の中に「芸術性」が持ち込まれたのである。

(2) 童話と児童観

童話と児童観を述べるには教育に注目しなければならない。特に明治の教育、とりわけ子供の教育について触れておきたい。明治6年(1873)3月の田中義廉編『小学読本』(文部省)には次の様にある。

人の務めは、種々にて士農工商とも皆別々の学文あり、されども、幼年のとき習ふべき学文は、みな同じことなり、これを一般の学文といふ、
○この学文を学ばざれば、何れの業をも学ぶこと能はず、
故に、人は六七歳に、至れば、皆小学校に入りて、一般の学文を習ふべし、
○小学校は士農工商とも皆習ふべき学文を教ふる所なり⁽⁵⁾

身分に関係なく、「幼年のとき習ふべき学文は、みな同じことなり、これを一般の学文といふ」は注目に値する。明治も中頃には子供のための読み物が次々と刊行されるようになった。

明治二十年代は、読み物としての少年雑誌が日本で初めて続々と刊行されだした時期であった。主な誌名を掲げれば、『教育小共のはな誌』(明治20・8)、『少年園』(明21・11)、『日本之少年』(明22・2)、『小国民』(明22・7)、『幼年雑誌』(明24・1)、『少年世界』(明28・1)等である。対象年齢は、小学校低学年から青年期までにわたり、様々なものであるが、どの雑誌も、当初は小説やお伽噺といった娯楽的作品は極めて稀で、教育的読売が主流を占めていた。⁽⁶⁾

日本における児童観の歴史を辿っていくと、特に明治以降の教育施策、児童福祉行政とも大きく関連して来る。歴史的に遡れば聖徳太子の悲田院をその萌芽と見ることもできるであろうが、明治に入ると文明開化と殖産興業という基本的な政策のもとに、富国強兵の考えが登場してくるようになった。ま

ずは児童保護に関する行政の流れは以下の通りである。

明治 元年 (1868)	墮胎禁止令
明治 4 年 (1871)	棄児養育米給与方
明治 7 年 (1874)	恤救規則
明治 23 年 (1890)	軍人恩給法
明治 44 年 (1911)	工場法
大正 6 年 (1917)	国立感化院令
大正 6 年 (1917)	児童研究所設置 (東京)
大正 8 年 (1919)	児童相談所設置 (大阪)
大正 9 年 (1920)	児童保護委員制度
大正 11 年 (1922)	小年法、矯正院法

苦しくもエレン・ケイが明治 33 年(1900)に『児童の世紀』を発表し、20 世紀を「児童の世紀」と呼んだことは、当時の日本にもその波動は届いている。

近代的児童文学研究は、児童研究の中に、教育・心理学研究の一環として発展過程をたどる。この時期はエレン・ケイ(ElLEN Key 1849~1926)の『児童の世紀』(一九〇〇)が国際的に大きな反響をよび、邦訳の大村仁太郎『二十世紀は児童の世紀』(一九〇六)が教育界に衝撃をあたえる時期とかさなってくる。児童学会の児童研究も「児童の世紀」に触発されてもろあがっていく。⁽⁷⁾

ここで日本における童話・児童文学研究の史的展望を考察して見ると次の通りとなる。

わが国の児童文学研究に三つの屈折点が指摘できるように思われる。第一は、明治期の教育・心理と密接した形における伝承的説話研究から、

大正期の童心芸術運動と連動する童話・童謡研究への発展期である。第二は、大正期デモクラシーもプロレタリア児童文学も否定してしまう戦時期少国民文学の統制期への転換である。第三は、敗戦による民主主義児童文学の新生期であった。⁽⁸⁾

こうした時代背景の中、大正 7 年(1918)7 月の鈴木三重吉の『赤い鳥』の発刊により、「子供のための芸術」を創作する必要性が宣言されるに到ったのである。この「子供のための芸術」は、芸術至上主義という当時の世相を反映して、童話が芸術としての地位を獲得するまでになるのである。大正 11 年(1922)5 月には蘆谷重常を中心に日本童話協会が設立された。会則には「童話の研究及び一般児童芸術の改善普及を計る」とあるのは、注目しておいてよいだろう。

(3) 芸術童話

蘆谷重常は大正 2 年(1913)4 月の『教育的応用を主としている童話の研究』(勸業書院)、大正 2 年(1913)4 月の『童話及伝説に現れたる空想の研究』(以文館)では童話は昔話を指していたが、蘆谷重常は「伝説学的見地」「芸術的立場」「児童心理学の上から、その応用の点から言へば教育的見地」の三つにまとめていたが、「芸術的立場」については、後年になってようやく発表されるようになった。

大正 13 年(1924)11 月の蘆谷重常『世界童話研究』(早稲田大学出版部)はワイルドの童話を各国の童話の項目に入れずに「芸術童話」として取り上げたことは興味深い。本書は「緒言」、「第一篇 古典童話」、「第二篇 口碑童話」、「第三篇 芸術童話」から成っておいる。

「緒言」には蘆谷重常の童話の分類の考え方が示されている。

童話は、もと伝説より発達したるものである。伝説とは、古代未開の人民が、口から耳へ語り傳へたる説話のすべてをいふ。それらの説話の

中、特に民族の歴史及び宗教と関係深きもの、藝術的或は思想的内容の優秀なるものは、或は詩歌に歌はれ、或は記録せられて後世に残つて居る。かくの如き古代の詩歌及び記録に遺れる、童話的要素に富める説話を稱して「口碑童話」といふ。文化の発達に伴ひ、民衆の藝術的の要求が口碑童話を以て満足せざるに至れば、口碑童話を材料として之に藝術的彫琢を加へ、或は作家自ら新しき傳説を創造して、更に別種の童話を造り出すに至る。これを「藝術童話」といふ。(9)

「イングランドの童話」と「ケルト族の童話」は「第二篇 口碑童話」で取り上げられている。「第三篇 芸術童話」は「第一章 ペロール及びドールノアの童話」、「第二章 ハウフの童話」、「第三章 アンダアゼンの童話」、「第四章 クリロフの寓話」、「第五章 トルストイの童話」、「第六章 ワイルドの童話」となっている。ワイルドの童話については次のように説明している。

ワイルドの童話は一八八八年に公にせられたる「幸福な王子」(Happy Prince and other tales)と一八九一年に公にせられたる「柘榴の家」(The House of Pomegranates)に収められてある。彼の童話は、アンダアゼンの想をフロオベルの筆で書いたと言はるゝほどのもので、其の空想の奔走なる、その描寫の精緻なる、その文章の流麗なる、他に匹儔を見ざるところ、恐らく近代英文学の如何なる作品を以て之と比較する遜色なかるべしと思われる一大藝術品である。(10)

また、童話において「子供と大人」について触れ、ワイルドの童話については次のように説明している。

童話において、大人の生活をあまりくはしく語ることは、大人の愚痴や希望を、童話といふ形に托するといふより外に解釋のしやうがない。この點においても、近代の童話には、假面のみの童話が少なからずあるが、ワイ

ルドのは大いに之と異なつて居る。彼の童話は、大人の童話でもいへるが、また子供の童話であるともいへるのである。⁽¹¹⁾

蘆谷重常は代表的な童話作家 7 人について論じたが、その位置付けは次の通りである。

予は近代童話作家の代表なるものとして、ペロール・ドールノア夫人、ハウフ・アンダアゼン、クリロフ・トルストイ、ワイルドの七家をあげた。ペロール及びドールノアは、ヨーロッパにおける童話作家の祖として、ハウフはハウフ型芸術童話の創始者として、アンダアゼンは最大の芸術童話家として、クリロフは近代寓話家の泰斗として、トルストイは思想本位童話家として、ワイルドは極端なる芸術的童話の作家として、いづれも正に芸術作家を代表するに足るものである。⁽¹²⁾

(4) ワイルド童話の受容

ワイルドの童話は *The Happy Prince and Other Tales* (1888) と *The House of Pomegranates* (1891) に収録されたものと考え、その作品は以下の通りである。

The Happy Prince and Other Tales

The Happy Prince

The Nightingale and the Rose

The Selfish Giant

The Devoted Friend

The Remarkable Rocket

The House of Pomegranates

The Young King

The Birthday of the Infanta

The Fisherman and his Soul

The Star-Child

ワイルドの童話は明治時代より積極的に紹介されていた。その様子を簡単に紹介すると以下の通りである。

- | | |
|--------------------|-------------------------------------------|
| 明治 43 年 (1910) 2 月 | 里見弴訳「鶯と薔薇」(『白樺』第 2 卷 2 号) |
| 明治 43 年 (1910) 2 月 | MK 訳「鶯と薔薇」(『太陽』第 16 卷第 3 号) |
| 明治 43 年 (1910) 7 月 | 田波御白訳「我儘な巨人」(『帝国文学』第 16 卷第 7 号) |
| 明治 43 年 (1910)10 月 | 田波御白訳「親友」(『東亜之光』第 5 卷第 10 号) |
| 明治 44 年 (1911) 8 月 | 天沼匏村訳「恋の創傷」(『心の花』第 15 卷第 8 号) |
| 大正 3 年 (1914) 6 月 | 長鹽清吾訳「鶯と薔薇」(『開拓者』第 9 卷第 6 号) |
| 大正 3 年 (1914) 11 月 | 堀口熊二訳『ワイルドの傑作』永文館 |
| 大正 4 年 (1915) 9 月 | 岡栄一郎訳「若き王」(『水甕』第 2 卷第 9 ～ 10 卷) (～10 月) |
| 大正 5 年 (1916)10 月 | 本間久雄訳「星の子供」(『新小説』第 21 年第 10 号) |
| 大正 6 年 (1917) 2 月 | 吉井中訳「魂を追ひ出した漁夫の話」(『国民文学』第 31～35 号) (～6 月) |
| 大正 6 年 (1916) 12 月 | 本間久雄訳『柘榴の家』春陽堂 |

“The Nightingale and the Rose” “The Selfish Giant” などが中心に紹介された。

日本における西洋の童話の受容を見ると、イソップ物語、グリム童話、アンデルセン童話を抜きにしては語ることはできないだろう。特にアンデルセン童話の影響は計り知れないものがある。

アンデルセン童話の圧倒的な影響力に比べると、社会風刺性が強く無垢なるものの美への憧憬をテーマとした大人向けとも言える 9 編のワイルド童話の魅力を真に理解した者は少ない。ましてや子供の享受など微々たるものであったと言えよう。⁽¹³⁾

童話を考えるには、教育との関係や当時の子ども観などとも大いに連動して来る。「子供のための読み物」としての童話なのか、童話も芸術性を求めるのかといったことが問われていることになる。ここで大きく取り上げた蘆谷重常はワイルドを藝術的童話作家として位置付けたのである。

蘆谷重常はワイルドの唯美主義を「人生と美」の関係を捉え、童話研究の観点からワイルドを本格的に研究した先駆者とも言えるかも知れない。有島武郎のように強く影響を受けた文学者もいるが、概して「ワイルドの童話が高尚かつ難解なために稀薄であった」⁽¹⁴⁾ というのが、一般的な捉え方であろう。

また、戦後ではあるが“**The Happy Prince**”を中心に日本への受容研究を扱った平成 16 年(2004)11 月の榊原貴教「ワイルドに見る翻訳社会史——『幸福の王子』と戦後日本の児童文学」(『翻訳と歴史』第 24 号、ナダ出版センター) といった素晴らしい研究業績も発表されている。

また、特に注目されているものとして有島武郎の「燕と王子」との比較研究もある。大正 15 年(1925) 5 月～7 月に有島武郎氏遺筆「燕と王子」(『婦人の国』第 1 巻第 1 号～第 3 号、新潮社) として発表されたものである。「有島武郎とワイルド」については、以下のような研究が発表されている。

1985年10月 鈴木幸枝子「有島武郎・翻案童話『燕と王子』について
の一考察——オスカー・ワイルドとの関係について」(『実践国文学』第
28巻, 実践女子大学国文学会)

1994年 8月 増子正一『有島武郎研究』新教社出版

2001年 3月 Sato, Miki “A Comparative Study of *The Happy
Prince* by Oscar Wilde and its adaptation, *Tsubame to Ouji* by
Takeo Arishima” (『函館英文学』第40号、函館英語英文学)

2004年 3月 増満圭子「翻案童話『つばめと王子』に見られる有島武
郎の子供観——原作オスカー・ワイルド『幸福な王子』との異同を中
心に」(『有島武郎研究』第7号、有島武郎研究会)

ワイルド童話の受容研究は同時に比較文学研究としても進んでいる。単なる
童話研究だけではなく、こうした有島のような受容もまたひとつの受容のあり
方であり、童話研究を通して、子供観、児童観とは何かといった問題にまで
発展するのである。

参考資料

大関五郎編『現代童謡辞典』紅玉堂書店、1928年3月

内藤午朗『童謡新辞典』大京堂書店、1947年3月

坪田譲治『児童文学入門』朝日新聞社、1949年1月

滑川道夫「児童文学史」(『文学』第19巻第8号、岩波書店、1951年8月)

長谷川誠一編『日本児童文学事典』河出書房、1954年3月

和久利栄一他編『世界児童文学事典』共同出版社、1955年3月

福田清人他編『児童文学概論』牧書店、1963年1月

横谷輝『児童文学の思想と方法』啓隆閣、1969年6月

桑野三郎『「赤い鳥」の時代』慶応通信、1975年10月

滑川道夫『日本児童文学の軌跡』理論社、1988年9月

- 波多野完治「文学における児童観」(『波多野完治全集』第7巻、小学館、1991年2月)
- 梅沢信生『子ども観の歴史』新読書社、1993年11月
- 松島正一「児童文学と教育——イギリス・ロマン主義時代における」(『イギリス・ロマン派研究』第19・20号合併号、イギリス・ロマン派学会、1996年3月)
- 河原和枝『子ども観の近代』中央公論社、1998年2月
- 宮脇源次他『児童福祉入門』(第4版改訂) ミネルヴァ書房、1998年11月
- 鳥越信「日本近代児童文学史の起点」(『日本児童文学』第44巻第6号、日本児童文学者協会、1998年12月)
- 佐々木隆「大正時代のワイルド受容」(『武蔵野短期大学研究紀要』武蔵野短期大学、2001年6月)
- 国立国会図書館国際子ども図書館編『日本児童文学の流れ』(平成17年度国際子ども図書館児童文学連続講座講義録) 国立国会図書館国際子ども図書館、2006年10月

注

- (1) 瀬田卓二「英米児童文学を日本はどうとりいれたか」(瀬田卓二他『英米児童文学史』研究社、1971年8月)、p.7.
- (2) Ibid., p.16.
- (3) 上笙一郎『児童文学概論』(東京堂出版、1970年4月)、p.179.
- (4) 桑原三郎「解説」(千葉俊二・桑原三郎編『日本児童文学名作集(上)』(岩波書店、1994年2月)、p.282.
- (5) 田中義廉編『小学讀本』文部省、1873年3月。(古田東朔編『小学讀本便覧』第一巻、武蔵野書院、1978年12月、p.110.)
- (6) 桑原三郎「解説」(『日本児童文学名作集(上)』)、pp.276-277.
- (7) 滑川道夫『日本児童文学の軌跡』(理論社、1988年9月)、p.340.
- (8) Ibid., p.341.

- (9) 蘆谷重常『世界童話研究』（早稲田大学出版部、1924年11月）、p.5.
- (10) Ibid., pp.381-382.
- (11) Ibid., pp.382-383.
- (12) Ibid., pp.389-390.
- (13) 石崎等「ワイルドと日本児童文学」（山田勝編『オスカー・ワイルド事典』北星堂書店、1997年10月）、p.508.
- (14) Ibid., p.509.